
日常が消えたこの世界

松元 淳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常が消えたこの世界

【Nコード】

N9234X

【作者名】

松元 淳

【あらすじ】

2012年12月22日

日英米で死者甦り人を襲うようになった
日本にいる高校3年の片岡光治は八王子を舞台に仲間と共に戦いそ
して逃げる

この作品には一部残酷な描写が描かれています

第1話 始まりなんて大抵どれも同じ様な感じ(前書き)

一部、編集しました

第1話 始まりなんて大抵どれも同じ様な感じ

2012年12月22日

皆はこの日に見覚えがないだろうか

そうマヤの予言とかいう予言に記されている人類滅亡の日だ

でも、日本では予言を信じてる人は少ないだろう、信じるのはアメリカ人やイギリス人等といった外国人の方が多だろう

だから、日本人の多くは忘れていだろう

でもこの時、本当に予言が的中するとは思わなかった

そう、こういった事は忘れた時にやって来るから恐ろしい・・・

2012年12月22日

AM:09:30・・・

俺の名前は”片岡光治”

市立八王子高等学校

クラスは3ーBだが、決して「3ねえーんB組！金八せんせえーい！！」じゃないからな

まあ、それはおいといて・・・

今は一時限目が終わって二時限目の授業開始まで時間があるから席でポーツとしている

何故なら・・・暇だからさ！

「よう光治」

二人の男女が来た

「何だ、祐介と綾香か．．」

二人は俺の友人の”佐藤祐介”と”佐々木綾香”だ
二人共、小学校からずっと同じクラスだった
いわゆる”クサレ縁”ってヤツだ

「何だつて何よ！

その「また、くだらない話題か、時代遅れの話題か．．」みたい
な言い方は」

「あのなあ．．お前らはいつもくだらない事とかしか話さないか
らだろうが全く、オカルト& a m p ; 予言& a m p ; 地球外生命体
オタクも大概にしとけよ」

祐介と綾香はオカルトや予言やUFO等と本当にどうでも良い事を
よく話す

ソレはまさにオタク級だし嫌と言うほど聞いてきたから、だいたい
何を話すか予想出来る様になってしまった

その為、コイツ等が将来近い内に変なカルト集団を創るんじゃない
かと心配だから、必死にオカルト等から引き剥がそうとしているの
にコイツ等は全く理解してくれない

「うっ！相変わらずの毒舌だな．．

そんな事より問題です、今日は何の日でしょう？」

「ヒントは一時期流行ってたやつだよ」

俺はコイツ等行動が大体分かるから答えがすぐにわかった

「ハア．．．（溜め息）

マヤの予言だっけ？」

俺は溜め息をしてから答えた

「正解！

よくわかったな」

「あん時、お前等に嫌と言うほど聞かされたからな頭にこびり付いて取れねえんだよ」

「それは災難だったな光治君」

祐介の野郎

自分でやっというて他人事の様に言いやがって

「そんな事より、今日は予言の日だから何かが起こるよ」

「綾香、ソレは人類が滅亡するって事しか無いよな」

「そついえばそつだね」

もうダメだ頭が持たない

俺は席を立った

「どつした？」

「ちょっと廊下の新鮮な空気を吸いに行ってくる」

俺はフラフラとした足取りで教室を出た

ラジオ体操の深呼吸の様に大きく息を吸い込んだ

「ラジオ体操にしては、時間が遅いし季節も早いんじゃない？」

黒髪のロングヘアー女が声を掛けてきた

「ああ、鈴木か」

朝から冗談をありがとよ

お陰で少し頭が軽くなったよ」

コイツは”鈴木李奈”

俺と同じクラスで剣道部主将で頭も良くそして美人という二次元で
良くありそうな女だ

「またあの二人でしょ」

「ああそうだよ」

「相変わらず大変そうね」

「何だ？」

心配してくれてるのか？」

「そんな訳ないでしょ！

勘違いしないでよ！何期待してんのよ！」

言い忘れていたけど、コイツは”ツンデレ”だ

「はいはい、分かった分かった
俺もお前に惚れられるのはゴメンだ」

「そんなのアタシだって同じよ」

「おい片岡夫妻、早く席に着けよ」

教室から祐介が呼んで来た

しかも夫妻とか抜かしやがった

「誰が夫婦だ（よ）！！」

俺と鈴木は祐介に向かって怒鳴ってから教室に入って自分の席に着いた

そして俺は前にいる祐介の耳元で

「テメエ、次あんな事抜かしやがったらぶち殺すと囁いた

「オオ怖い怖い

でもお似合いだと思っぞ」

「私も李奈ちゃんと光治君はお似合いだと思っよ」

隣の綾香も賛同してきた

「お前等なあ・・・

そっとう変な事を言って妙な噂が広まったらどうすんだよ」

「わりいわりい」

「ゴメンね」

「全く」

そして俺は外を見た

俺の席は窓際にあるから暇な時とかはよく外を見ている

此処からは、校庭と校門の辺りがよく見える・・・ん？アレは・・・

「おい、アレは何だ？」

「「ん？」」

祐介と綾香は外を見た

「光治何言ってるの？」

「どう見たって、体育の授業中の女子達と黒川先生じゃないか」

「違う、校庭じゃなくて校門の方だ」

二人は校庭しか見てなかったから校門の方に指を指した

「アレは何だ？」

祐介が双眼鏡で校門の方を見ている・・・って双眼鏡！？

「お前！また双眼鏡を持ってきてるんのかよ！？」

つい最近、校庭で体育の授業受けてる女子を見てて担任の尾崎に警告されたばっかじゃねえか！」

「うるせえ！男が女に興味を持って何が悪いんだ！」

「お前の場合は、犯罪に近い事してる様なもんなんだよ！何でそんな単純な事も分からないんだ”変態”！！」

「テメエ！今”変態”って言いやがったな！」

「”変態”に”変態”って言って何が悪いんだ”変態”！！」

「何回も”変態”って”うつさい！！”っ！！」

祐介と言い争っていると、鈴木が大声で怒鳴り此方に近付いて来た

「アンタ達、何騒いでんのよ・・・」

ちよっとは静かに出来ないの？」

「ほら見ろ、お前の奥さんがっ」「黙れ（うつさい）！！」「ゴブッ！」

鈴木と一緒に祐介の顔面を殴って黙らせた

祐介は倒れてそのまま気絶した

「全く、何でこんな奴とアタシが夫婦に見えるのよ・・・それよりも、さっきから何騒いでんのよ・・・」

鈴木が呆れながら聞いてきた

「ああそつだ、ちよつと外を見てくれ」

「外？」

鈴木はとりあえず窓から外を見た

すると、軽蔑を込めた目で俺を見てきた

「な、何だよその目は」

「……アンタねえ、校庭にいる女子を見て騒いでたの？
さすがにちよつと退くわ」

「李奈ちゃん……
校庭じゃないよ」

「えっ？」

「何でお前も祐介と綾香と同じで校庭しか見ないんだよ……」

「うっさいわね！」

アンタが最初からそう言わないからでしょ！」

鈴木は再び外を見た

まさか、コイツまで祐介達と同じで校庭しか見ないとはなあ……

「ちよつと光治、”変態”の双眼鏡貸して」

「誰が”変態”だ！」

「」「あ、起きた」「」

気絶している祐介は”変態”という言葉に反応して起き上がった

「祐介、ちよつと双眼鏡貸して」

「何だ？お前ひよつとして女が好きなのか？」

「そんなわけないでしょ！」

アタシは校門の方を見るだけで、アンタとは違つたのよ！
とにかく、さつさと双眼鏡貸して！」

「分かった分かった、怒るなよ」

鈴木は祐介から双眼鏡を借りて、外を見た

「何か見えたか？」

「ちよつと待つて

綾香ちゃん、ちよつとこれ見て」

鈴木が綾香に双眼鏡を渡した

綾香は双眼鏡越しで校門を見た

「凄いよ

校門の前にいる人達、皆ゾンビの様な肌の色してるよ」

「綾香、双眼鏡貸してくれ」

俺は綾香に渡された双眼鏡を通して校門を見た

確かに、祐介と綾香と三人で何回かはゾンビ映画を見た事があるか

ら分かる

校門の前にいる人達は灰色の肌をしていた

「アイツ等まるでゾンビじゃねえか」

「何だよ、俺にも見せてくれよ」

「ああ、良いぞ」

俺は祐介に双眼鏡を返した

そして祐介も双眼鏡で外を見た

「アンタ本当に校門の人達見てるの？」

鈴木は祐介が校庭の女子を見てると思っていたようだ

「失敬な！」

ちゃんと校門にいる灰色の肌の奴らを見てるからな

「まあそんな事よりも、アイツ等は何なんだ？」

「そんな事よりって・・・」(小声で)

「ハロウィンかな？」

「「「いや、違えよ」(違うから)」「(違うわよ)・・・」」

綾香の言った事に俺達はつつこんだ

つか、天然にも限度だってあるからな

「あっ！」

「どうした鈴木？」

「校門の前にいた奴らが入って来たわ」

鈴木が校門の方に指を指している

校門の方を見ると奴らが入って来た

「何か嫌な予感がするな・・・」

「確かに、光治の勘は良く当たるからな、ホレッ」

祐介は双眼鏡を俺に渡してきた

そして、双眼鏡越しに奴らを追った

奴らはフラフラとした足取りで校庭に向かって歩いている

服はボロボロで口の周りは真っ赤になっている

全くこれじゃ季節外れのハロウィンだな、菓子でも貰いに来たのか？

そして黒川は奴らの所に走って行き、何か話している

すると奴らはいきなり黒川の首に噛み付いた

黒川の断末魔の悲鳴と女子達の悲鳴が混ざって学校中に響き渡った
皆が窓によって来て外を見ている

「な、何だよアレは！？」

「どうなってるの！？」

「黒川先生が喰われている！！」

と皆が口々に叫ぶ

『現在、校内に不審者が侵入しています
生徒達は教職員の指示通りに行動してください
繰り返します、な、何だ君は来るな！此方に来るな！
ギヤアアアアア！』

放送室にいた教師が食われちゃった
たくっ！何が起きてるんだよ！

教師の叫び声がしてから2、3秒経つと、他の奴らは一斉に教室か
ら走って出ていった

「な、何が起こってるんだ？」

「さ、さあ・・・」

「ちょっとヤバイよね・・・」

「バカ！早く逃げないとアタシ達も黒川先生みたい喰われるわよ！
！」

動転してた俺達を鈴木が正気に戻してくれた
そうだ、まずは此処から脱出しないと

「そうだな、今すぐ此処から逃げな」それは辞めとけ「っ！？」

扉の方から声がしたからその方に向くと、扉の前にシャツダラで第
三ボタンまで外していてタバコをくわえている男、”坂崎隆二”が
いた

要するに不良だ

隆二は俺達の方に歩いて来た
隆治が近付いてくると同時に、とてつもない威圧感も俺達に迫って
くる

「隆二、さっきのはどういう事？」

「言った通りの事だ

今は辞めた方が良いぞ」

「あら、随分と優しい不良ね」

「うるせえクソ女」

鈴木は少し皮肉を込めて言った

それに対して隆二は舐めきった感じで鈴木に汚い言葉をはいた

こんなやり取りが出来るのは二人が幼馴染みだからであって、他の
奴が隆二みたいな事を言ったら即あの世行き決定になってしまう

「なあ隆二、どういう事が教えてくれないか？」

「ああ、今校内の階段は自分優先の奴しかいないからな

我先にと逃げようとしてるから全く進めなくて、アイツ等が来る
そして上にいる奴は下にいる奴を落として何処かに逃げるといった
事が学校中で起こってるわけだ」

「じゃあ、このまま喰われろってわけか？」

「それ違うな祐介
誰も大人しく喰われるとはいってない」

「じゃあどうするの?」

「戦いながら逃げる」

「隆二、どういう事なの?」

「それは、アイツ等を倒してからだ」

扉から生徒が三人入って来た

だが、服はボロボロで身体中から血が流れていてその内一人は腸が見えている

「よしとりあえず倒すぞ、アイツ等は人なんて言える奴らじゃねえからな」

「じゃあゾンビって事?」

「そうだな」

よく分かってるな佐々木」

「隆二!どうやって戦うんだ!」

「何でもいいから教室に有る物を使い!」

隆二は俺の机を持って、中に入ってる物を全部出した

「わかったよ」

俺は近くにある武器になりそうな物を探した
椅子と机しかねえ．．．

とりあえずさつきまで座ってた自分の椅子を持った

「よし行くぞ！

躊躇したら死ぬからな！」

「ああ！」

俺は隆二とゾンビの方へ向かった

2012年12月22日の今日、予言が現実になった俺は近くにある武器になりそうな物を探した

椅子と机しかねえ．．．

とりあえずさつきまで座ってた自分の椅子を持った

「よし行くぞ！

躊躇したら死ぬからな！」

「ああ！」

俺は隆二とゾンビの方へ向かった

2012年12月22日の今日、予言が現実になって人類滅亡へのカウントダウンが始まった

第1話 始まりなんて大抵どれも同じ様な感じ（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております

第2話 ソンビって何故か物凄い馬鹿力なんだよね(前書き)

一部、編集しました

第2話 ゾンビって何故か物凄い馬鹿力なんだよね

「オラアッ！」

ゴシヤッ！

隆二はゾンビの頭に机の足を叩き付けると頭蓋骨が碎けてその場に倒れた。

俺も続いて椅子の足でゾンビの顔を殴った。

グシヤッ！

という気持ち悪い音と感覚が身体中に響いた。

俺が一体倒した時に隆二は残りのゾンビを倒していた。

「ふう、まあこんな所か」

「やれやれ、周りの物を使って戦うなんてまるで”龍が如く”の様な」

とりあえず俺と隆二は一息ついた。

でも、いつまでも休んでるわけにはいかない。

「確かに良い例えだが、先を急いだ方が良いな」

「そうだな、三人共行くぞ」

「おっ」

「OK」

「ねえ、ちょっと寄ってほしい場所があるんだけど」

「「「「ん？」「」「」」

場所は変わって剣道場

鈴木が何か取りに行きたいと言ったから此処に来ている。

「お待たせ」

鈴木が戻って来た

そして手には・・・木刀だと！？似合い過ぎる

「な、何だその木刀は？」

「なによ、アタシが木刀使っちゃ悪いの？」

「いや、そうゆう訳じゃないんだが」

「ズルイよ！一人だけそんな強い武器使ってさ！」

祐介が鈴木の木刀にけちつけている

「しょうがないじゃない！」

これ一本しか無いし、この中じゃアタシが一番こうゆう物に使い馴れているんだから！」

「確かに、李奈は剣道部だからこういった物を持ってた方が良い」

「諦める祐介」

俺は隆二に賛同した。

「諦めるって、俺は使いたいわけじゃねえよ」

「そんな事よりも、早く学校を出よう」

「隆二の言う通りだけど、武器が余りにも貧弱すぎるよな」

現在の武器

- ・机×1
- ・椅子×1
- ・木刀×1

「確かに、此処から出る前に強い武器を増やしたいな
だが良いところを知ってる」

「隆二君、本当に？」

「ああ、アレなら佐々木も祐介も扱えるな」

「って事はそれまでは俺と綾香は丸腰か？」

「普通に考えてそうね」

「李奈ちゃん、絶対守ってよ」

「大丈夫よ、心配しないで」

とりあえず綾香は大丈夫だろう。
さて、祐介はどうするか。

「光治頼んだぞ！」

「ああ、お前はゾンビの餌係だから心配すんな」

「そつゆう事言うなよ！」

「光治、祐介行くぞ」「わりい、ほら行くぞエス・・・祐介」

「お前今、餌って言おうとしただろ！」

俺は祐介が言ってる事を無視しながら隆二についていった。

「ところで、何処に向かってんだ？」

「部室の鍵を取りに行くんだ」

はい、今のでだいたい分かっただけです。
それにしても、さつきから何か聞こえる様な・・・

「やっぱりバットか!？」

「まあ、そんな所だ。良く分かったな」

祐介も気付いたか。

まあ、気付かない方がおかしいよな。

「何で分かったの？祐介君ってもしかして、エスパー？」

「綾香、普通は誰でも分かるからな」

「ええ！？そうなの？」

ゴメン綾香。分からない奴はおかしいと思った俺を許してくれ。

「ねえ、何か聞こえない？」

「急にどうしたんだ李奈？聞こえるのは、ゾンビのお決まりの呻き声と悲鳴くらいだが」

確かに隆二の言う通りでゾンビ達の呻き声と生存者達の悲鳴が聞こえるけど、それ以外にも何か聞こえる。

「確かに何か聞こえるな」

「光治も聞こえるの？」

「ああ、僅かにだけだな」

「それよりも先を急ごう。アイツ等もお出ましの様だからな」

隆二の向いてる方を見ると、5体のゾンビが此方に歩いて来てる。

「じゃあ早く部室の鍵を取りに行こうか」

「いや、それも無理そうだな」

死体と残骸が散乱してる階段を降りようとしたら、隆二に止められ

た。

「どつゆつ事だ?」

「ああゆつ事だよ」

「は?どつなつてんだよ...」

そこには信じられない光景が写っていた。

階段にあるついさつきまで死んでいた人が起き上がっている。

「とりあえず上に行くぞ。みんな走れ」

隆二に言われた通りに俺達は一斉に上の階へと向かった。下ほどじやないが、やっぱり死体や残骸が転がっている。

「うおっ!?!」

いきなり何か足を掴まれた。

俺の隣に倒れていた死体が甦ったらしく、俺の足にかぶりつこうとしている。

「「「光治（光治君）!」」」

「クソツ! 離れやがれ!」

俺はゾンビの頭を何度も蹴り続けるが、全く動じない。

それに、何て馬鹿力何だコイツ!

ゾンビが俺の足に噛み付こうとした瞬間

グシャッ

と音がして、ゾンビは動かなくなった。
そして隣には木刀を持った鈴木がいた。

「ほら、早く行くわよバカ！」

「あ、ああ」

俺は足を掴んでいた死体を下の階に向けて蹴ってから、五階へと向かった。

五階は所々に血が飛び散っているけど、ゾンビも人の姿も見えない。
でもさつきからかすかに何かの音楽が聞こえる

「何だこの音は？」

「何かの音楽の様ね」

「吹奏楽部の部室から聞こえてくるな」

「光治何か心当たりないの？」

「鈴木、何故俺に聞いてくるんだ・・・」

「だって、アンタの周りには”変な奴”が多いじゃない」

「それは俺が”変な奴”ばっかとするんです”変な奴”って言いたいのか？」

「別にそうゆう意味で言った訳じゃないわよ！」

「痴話喧嘩はよしてくれないか？」

このままだと、ヒートアップしそうと思ったのか隆二が間にはいった。

つか、痴話喧嘩って・・・

「ちょっと隆二！今の言い方だと、アタシと光治が夫婦みたいな言い方じゃない！」

「そんなのどうでも良いだろ。」

「アンタねえ、自分で今の状況を作つといてそれは無いでしょ！」

「ああ、それは悪かったけど、アイツ等に喰われる前に音がする所に行ってみよう

会話は移動しながらでも出来るからな」

確かに、階段には無数のゾンビが俺達との距離を少しづつ詰めていた

「そうだな。急いどう」

俺達は吹奏楽部室がある左の方に向かって走った。

「ねえ隆二君」

「何だ綾香？」

「音はゾンビ達を引き寄せるとだよ。何で音楽が聞こえてくる所に行くの？」

「生存者がいるかもしれないからだ」

「それは、助けるって事なの？」

「ああ」

「でも隆二、それはかなり危険じゃないのか？」

「確かに危険だが、逃げ道が無いから仕方ない」

後ろにはゾンビが俺達を追って来てるから後戻りは出来ない

「なら、右に行けばよかつたんだよ」

「それは甘いな祐介。もし、右に行ったとしても今と同じ様になるだろうな」

「何か根拠があるのかよ」

「ああ、ゾンビ共は必ず全ての階にいるからな、教室に行く前は何度もゾンビに出会ったからな」

「じゃあ、俺と隆二が初めて倒したゾンビは」

「恐らく、追い掛けて来たんだろう」

「なるほどな」

「よし着いたぞ」

何だかんだ話しているとあっという間に吹奏楽部室前に着いた。幸いにもゾンビはいなかった。

『California rest in peace
Simultaneous release . . .』

さっきから聞こえてたのはこの曲か . . .

「此処で間違いないな」

「これってロックよね？」

「しかも海外のね」

「これは . . . 映画版デ ノートの主題歌だよな」

海外のロックに聞き覚えのあるこの曲 . . .

「まさか！」

「どうしたの光治!？」

「祐介と綾香は誰だか分かるよな。」海外のロック”とこの曲で予想はつくだろ」

「うん」

俺達三人は普通に分かるが、隆二と鈴木は首をかしげている。

「間違いない、アイツだ・・・」

「音楽室にいる奴が誰か分かるのか？」

隆二が聞いてきた。

”海外のロック”から連想できる奴はアイツだけだから分かる。

「ああ」

「やっぱりアンタの知り合いじゃない」

「まさか、本当にアイツだったとはなあ・・・」

「お前の知り合いって事は中に入れてくれるかもしれないのか？」

「多分な」

俺は扉前まで来て取っ手を掴んで開けようとしたが開かない。
そして音楽が急に止まった

「どうだ？」

「中から鍵が掛けられてる」

「なら、名前を呼べばいいじゃない」

「今やるよ。」

おい吉彦、開けてくれ」

海外ロック好きの”アイツ”の名前を呼んだ。

「その声は光治か!？」

扉の向こうから男の声、つまり吉彦の声が聞こえてきた。

「ああ」

「お前一人だけか？」

「いや、俺以外に四人いる」

「誰も噛まれてないな!？」

「は?何言ってるんだ?」

吉彦はいきなり意味不明な質問をしてきた。

「今言った通りだ。誰もアイツ等に噛まれていないな?」

「ちよつと待ってる」

俺はみんなの方に向いた。

「どうだった?」

隆二が聞いてくる。

「よく分からない質問をされたよ。」誰もゾンビに噛まれてないか?」ってな

「どう言う意味だ？」

「さあな、勿論誰も噛まれてないよな？」

「当たり前でしょ」

「大丈夫だ」

「噛まれてないけど」

「大丈夫だよ」

鈴木、隆二、祐介、綾香の順で噛まれてないと答えた

「そうか．．．ってヤバイ！アイツ等がもうそこまで来てるぞ！」

後ろからゾンビ達が近付いて来ていて、あと数秒で俺達に追い付く距離になっていた。

俺は扉まで駆け寄った。

「誰も噛まれてない！噛まれてないから早く開ける！アイツ等がすぐそこまで来てる！」

俺は扉に何回も椅子を叩き付けながら叫んだ。

「分かった！今開ける」

「早くしろ！！」

俺は大声で叫んだ。

その後ろでは隆二が机を、鈴木が木刀で次々にゾンビを倒しているが、その後ろでは他のゾンビが少しづつ近付いて来ていた。

「おい！早くしないとブツ殺すぞ！！」

俺は怒鳴りながら鉄の部分が所々ひしゃげた椅子で扉を叩きまくった。

カチャッ

鍵が開いた音がして扉が開き、そこから吉彦が顔を出した。

「早く入れ！」

「遅えよクソ野郎」

「バリケードを張っていたんだよ」

「まあいい、みんな！早く入れ！」

俺がみんなを呼ぶと、皆は扉に駆け寄って来た

「早く！早く入れ！」

俺達が入ると吉彦は急いで扉を閉めた。

扉の向こう側では、無数のゾンビが扉を叩いている音が聞こえる。

「助かったよ吉彦」

俺は再び即席のバリケードを張っている吉彦に礼を言った。

「ああ、良いつて事よ。疲れただろ？そこら辺でくつろいでくれ」
「そうさせてもらつよ」

俺はひしゃげた椅子をその辺に置いてから部屋の真ん中まで歩いていき、そこで座った。室内には祐介や綾香達の他に男が2人、女が1人の計3人の男女がいる。見覚えの無い顔だから、恐らく後輩だろう。

それにしても、さつき椅子で叩きまくりながら怒鳴り散らしていたせいか、怯えている。

隆二はポケットからタバコとライターを取り出して、タバコに火を付けて吸っていて、祐介達は窓の付近で座っている。

即席バリケードを張り終えた吉彦が此方に近付いて来た

「しかし、剣道部の鈴木に此処等一体で最強の不良の隆二がいるとはな。お前は運が良いな」

「まあな」

「さてと、これからどうする？」

「そうだな・・・よし！決めた」

「何をだ？」

「なあ吉彦、皆を集めてくれ」

第2話 ソンビって何故か物凄い馬鹿力なんだよね(後書き)

御意見、御感想等お待ちします

第3話 自己紹介！それから・・・武器を集めよう！（前書き）

何か色々と変になっていたので直しました。
すみませんでした

第3話 自己紹介！それから・・・武器を集めよう！

今、吹奏楽部室の中央には皆が集まっている。

「なあ光治、皆を真ん中に集めたけどこれから何するんだ？」

吉彦が聞いてきた。

何でこの後の展開が分からないんだ？

「何って、今後どうするか会議に決まってるだろ。何で分からないんだ？」

「うるせえ！そんなのどうでも良いだろ！」

俺が何で分からないか聞くと吉彦は何故かキレた。

「なあ、これから何するんだ？」

祐介が聞いてきた。

まあ祐介なら分からないのが普通だから俺は気にしない。

「俺達は、これから共に行動するんだ。

だから皆にはこれから自己紹介をしてもらおうと思ってる。皆はどう思う？」

俺は皆の前に立って、中央に集めた理由を話した。とは言っても、理由はあともう一つあるけど。

「確かにそうね。お互いの事を知らないと、この先何かしらの支障

「がでると思っわ」

「李奈の言う通り、この先何かしらの支障をださない為にも互いを知った方が良いだろう」

隆二と鈴木は自己紹介に賛成した。

「他は？」

俺は残りの六人に聞いてみた。

「俺は別に良いぜ」

「私も良いよ」

「別に構わないぞ」

祐介、綾香、吉彦も賛成した。あとの三人も喋りはしなかったけど、頷いた。

「じゃあ、まずは俺からだな。」

俺は片岡光治、クラスは3年B組だ。ゾンビが現れた時は教室にいて、そこから綾香や隆二等と此処に逃げて来たんだ。よろしくな」

俺は知らない3人に自己紹介をした。

「じゃあ、次は祐介だ」

「オツケー」

俺は祐介がいた所に座って、祐介は俺がいた所に移動した。

「俺は佐藤祐介、光治と同じクラスの3年B組だ。ゾンビが現れた時は教室にいて、そこから光治達と一緒に此処に来たんだ。まあよろしくな」

「ちなみにコイツはゾンビの囃役だ」

「そつゆう事言つなよ！」

軽い(?)冗談を言ったら、祐介がツツコンできた。

「冗談だよ。」

次は綾香の番だな」

「え!？わ、私かあ．．．緊張するなあ．．．」

綾香はそう言いながら、前に立った。

「わ、私は、佐々木．．．綾香．．．です。」

ク、クラスは．．．光治君と祐介君と．．．同じ3年B組．．．です。ゾンビが、現れた時は．．．教室に．．．いて．．．そこから光治君や隆二君に李奈ちゃん．．．とい、一緒に此処に来ま．．．した。よ．．．よろしくお願いします！」

綾香は緊張しながらも何とか自己紹介を終えて、お辞儀をした。しかし綾香の奴、あんな秘密兵器を隠してやがったのか．．．つい、カワイイと思ってしまった。

「次は鈴木番だ」

「分かってるわよ、そんな事」

鈴木はそう言っただけ前に立った。それにしても、相変わらずツンツンしてやがるな。

「鈴木李奈よ。」

剣道部主将でクラスはあの”バカ”と同じ3年B組でゾンビが発生した時は教室にいて”バカ”達と一緒に此処に来たわ。よろしくね。」

自己紹介で”バカ”って言った時だけ視線が何故か俺の方を向いていた。

まさか”バカ”って俺の事か!?

「隆二の番だぞ」

「ああ」

隆二はタバコをくわえたまんまで前に立った

「坂崎隆二だ。”フー”」

クラスは3年C組で、”フー”、ゾンビが現れた時は学校の屋上で寝てて、そこからアイツ等と合流して此処に来た。よろしく、”フー”（”フー”の所はタバコの煙を吐いている）」

アイツ寝てたんだ・・・

つか、タバコ吸いながら自己紹介するなよ・・・

「じゃあ次は、吉彦か」

「そつだな」

吉彦は前に立った。

そついえば、コイツは自己紹介の時、色々と面倒なんだよなあ・・・
適当な所で終わらせるか。

「田中吉彦だ。

クラスは隆二と同じ3年C組でゾンビが現れた時は教室にいて、
こから此処に逃げて来たんだ。

ちなみに、俺が好きなバンド「お前が」レツ　リ”好きなのは、
充分分かってるからそこから先は言わなくていいぞ”なっ!?”

やっぱりこうなった。

1年の時も自己紹介が長くて担任に強制終了させられてたなあ・・・
吉彦は、”レツ　ット・リペツ　ーズ”というバンドが大好きで、
その中でもベース担当の”フー”とかいう奴に憧れてるそ
うだ。

「おい！何で自己紹介の途中で終わらせるんだよ!?!」

「テメエが自己紹介する度に”レツ　リ”の事を話だして長くなる
からに決まってるんだろ!?!」

吉彦が怒鳴ってきたから、俺は吉彦に怒鳴り返した。

「ちよつと！アンタ達が怒鳴るからあの子達が怯えてるじゃない!」

「あ・ああ、すまない。」

「全く、この先の事に何かしらの支障が出たらどうすんのよ」

「おやおや、妻の尻に敷かれて」「だから夫婦じゃねえ！（じゃないわよ！）」「ゴブアツ！！」

吉彦が調子に乗った為、鈴木がアイツの腹を蹴って、俺は顔面に右ストレートをおみまいすると、吉彦は少し吹っ飛んでそのまま気絶した。

「何で、俺がこんな女と夫婦なんだ（私がこんなのと夫婦なのよ）
・・・あつ！！」

俺と鈴木はあの3人の方に向いた。

ああ、やつぱりな・・・メツチャビビってるよ・・・今近付いたら、パニックに陥るかもな・・・

「なあ綾香、頼みがあるんだが」

「何？」

「俺の代わりに進めてくれないか？」

「どっして？」

「何でってなあ・・・」

吹奏楽部前では扉を椅子で叩きながら怒鳴って、室内じゃ、吉彦と怒鳴りあった上に、殴って気絶させちまったからアイツ等の危険順位が

1・俺

- 2 ・鈴木
- 3 ・ゾンビ
- 4 ・隆二
- 5 ・吉彦

って感じになってると思うんだ。だから今俺が話し掛けてもなあ . . .
」。

「分かった、私に任せて」

綾香はそう言っつて胸を叩いた。

「すまない、助かるよ」

「良いよ、気にしないで」

俺が申し訳なさそうにそう言つと綾香は笑顔でそう答えた。

「あ、ああ . . . / /」

俺はつい顔をそらしてしまった。

やべえ . . . あの自己紹介のせいで、アイツが笑顔になつただけで
「カワイイ」って勝手に認識してやがる。目を覚ませ！目を覚ます
んだ俺！！

「大丈夫？何か顔赤いよ」

「だっ、大丈夫だ。」

そ、それより頼んだぞ」

綾香が心配した様子で聞いてきたから、俺は慌てて答えた。

「任せといて」

綾香はそう答えてウインクをした。

(やめろおおおお!!)

精神が不安定な時にそうゆう事すんじゃねえええ!!)

俺は心の中で叫んだ。

「ねえ!

自己紹介、次は君達の番だよ。教えてよ君達の名前とクラスとゾンビが現れた時に何処にいたか教えてよ」

綾香は怯えてる3人を呼んだ。

すると3人は俺達に聞こえない位の声で話し合いを始めた。

「全く、アンタが怖がらせたからよ」

「いや、正確には俺とお前が怖がらせたんだからな。そこんとこ忘れんなよ」

俺は鈴木が言った事の間違いを訂正した。

「それは、アンタがああ”変人”の自己紹介を強制終了させたからでしょ! 違っ?」

「あんな、吉彦の自己紹介を放置してると二、三時間位”レツリ”の事を話続けるんだぞ。お前はそれを耐えられるか?」

「それは、さすがに無理ね。止めて正解だったわね」

鈴木が気絶してる吉彦に指を指しながら理不尽な事を言ってきたから、俺は吉彦の自己紹介を強制終了した理由を説明すると納得してくれた。

「おいそこの”夫婦”、あの三人が待ってるぞ」

隆二が今さつきまで怯えて三人が”話していいですか？”オーラ全開でこつち見て待ってる事を教えてくれた・・・って今、”夫婦”って言いやがったな。

「だから、夫婦じゃねえ(じゃないわよ)！！」

と俺と鈴木は隆二に同じタイミングで同じ事を言った。

「そんな事より、アイツ等待ってんぞ」

隆二は三人の方に指を指しながらそう言った。

「悪かったな。自己紹介してくれ」

俺がそう言うと三人は一瞬ビクツとしてから

「・・・はい・・・」

と言った。

そして三人の中の内、一人の男が前に出た。

「ぼ、僕は．．宮本．．幸助です．．．。クラスは．．1年A組で．．ゾンビが現れた時は．．教室にいて、そこから．．一人で此処に逃げて．．きました。よろしく願います．．．」

幸助と名乗った男は怯えた様子で自己紹介をした。やっぱり、短時間で沢山の恐怖を体験したからなあ．．．次は幸助とは違う男が前に出た。

「安岡光太です．．．」

クラスは2年A組で．．ゾンビが現れた時は．．教室にいて、そこから彼女と此処に逃げてきました。よ、よろしく願います」

光太と名乗った男が後ろにいる女を指しながら自己紹介をした。この光太って奴は、さっきの幸助ほど、怯えてはいないな。

さてと、あと一人は．．．めっちゃモジモジしてるよ、大丈夫なのか？

すると、その娘は光太の隣に移動してから耳元で何か囁いている。それが終わると光太が口を開いた。

「彼女は古林葵です。僕の彼女でクラスは僕と同じ2年A組でゾンビが現れた時は教室にいて、そこから此処に逃げてきました。」

が光太が代わりに彼女の自己紹介をした。しかもリア充かよ、爆発しやがれ！．．．と言いたい所だが、今はそんな事言ってもらえない程の事態だから我慢しよう。

「なあ光治、これからどうすんだ？」

と祐介が聞いてきた。

確かに、この先どうするかな・・・

吉彦が気絶してるから作戦会議は無理だからなあ・・・そうだ。

「そうだな・・・とりあえず武器になりそうな物でも探すか」

と俺は祐介の質問に答えた。

人数が多くなつたから、武器が少ないと半分位に減る可能性があるから今はとりあえず武器になりそうな物を探すか。

「じゃあこれから、皆で武器になりそうな物を探すぞ。いいな？」

「ooooooooooooああ（ええ）（はい）！」「」「」「」「」

俺の問いかけに気絶している吉彦を除く全員が返事をした。

↳十分後↳

「まあ、こんなもんかな」

と俺は言った。

此処にある全ての物を”10”として、武器になりそうな物は”10分の1か2”位だが、それでも良い収穫だ。

収穫は

ギター×5

机・・・沢山

椅子・・・沢山

ベース×1（何であるの？）

といった所だ。

「で、どれを持っていくんだ？」

「そうだな．．．ギターは机や椅子より壊れやすいけど使いやす
いから3つ位は持っていていくかな」

隆二が聞いてきたから俺はそう答えた。

「じゃあ、机と椅子はどうすんだ？」

今度は祐介が聞いてきた。

「適当に分けるよ」

と俺は面倒くさいから適当に答えた。

「おいおい．．．適当だな」

「机と椅子なんて学校中に沢山あるからどうだっていいだろ」

「まあ、確かにそうだけど．．．」

「うっ．．．うっ．．．」

俺と祐介がどうでも良いやり取りをしていると、吉彦が目覚ました。
つか、気絶から覚めるの早いだろ。

「うっ．．．此処は？．．．つか、何で鼻が痛いんだ？」

吉彦は自分が気絶する前の事を覚えてないのか？

まあ、それはそれで俺にとっては都合が良いけど．．．

「あ！そうだ。光治デメエ！よくも俺の顔面殴りやがったな！それに、鈴木も俺の腹を蹴りやがって！」

やっぱり覚えてたか．．．さすがに、そう都合良くいかないよ。

「アレは、俺と鈴木の前で”禁句”を言ったお前が悪い」

「そうよ、アンタがアタシと光治の事を、ふっ、ふっ、夫．．婦って言ったのが悪いのよ」

俺が言った事に鈴木も賛同した。

”夫婦”って所は別に無理して言わなくても良いと思うが．．．

「それは、お前が俺の自己紹介を強制終了したから、俺が”禁句”を言うはめになったんだろうが」

吉彦はあまりにも理不尽な事を言ってきた。

「結局、八つ当たりかよ」

「最低ね」

俺と鈴木は吉彦に冷たい視線を浴びせた。

「それよりも、今何やってんだ？」

と吉彦はいきなり話題を変えてきた。

「どんな事を言われても”知るかボケ！”って訳かよ、まあ吉彦らしいな。」

「今は武器を集め終えた所だ」

俺は吉彦の質問に答えた

。

「武器つて・・・机と椅子ばかりだな、それとギターが少しつて、大丈夫なのか？」

「知らねえよ！」

俺は吉彦が言った事に若干苛ついた。

この野郎、今度は気絶じゃなくて殺してやるうか？

「俺には、そんなギターよりも強力な・・・って、何で俺のベースが他のギターと一緒に置いてあるんだ！？」

「だって、武器になりそうな物は真ん中に置いてくれと言っただが、聞いてなかったのか？」

「聞ける訳ねえだろ！」

気絶してたんだぞ。そんな分かりきった事を聞くんじゃねえよ！」

「アンタ達、それはどうでも良いから作戦会議しましょうよ」

鈴木は長引くと思ったのか、俺と吉彦のやり取りの間に入って止めた。

「そうだな、じゃあこれから作戦会議を始めろぞ」

俺は皆に聞こえる様にそう言った。

第3話 自己紹介！それから・・・武器を集めよう！（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております

第4話 作戦会議！そして作戦決行！（前書き）

色々な事で遅れました

第4話 作戦会議！そして作戦決行！

「じゃあこれから作戦会議を始めろぞ」

俺は皆に聞こえる様に言った。

「作戦会議？」

吉彦が首をかしげた。

「まあ、作戦と言うよりは、どうやって学校から脱出するかだけだな」

「何でそんな面倒くさい事をしなきゃいけないんだ」

吉彦が面倒くさいとか言いやがった。

「じゃあお前は、あのバリエードを外して扉を開けて、わざわざ外にいるゾンビに自分の肉を捧げるのか？」

俺は即席のバリエードが張られている扉を指しながら、吉彦に皮肉を込めながらそう言った。

「うっ！そ、それは・・・」

「ほらな、やっぱり何も考えていない。お前みたいな奴や誰も死なせない為に作戦会議をするんだ。分かったな？」

「あ、ああ」

俺は何も分かっていない吉彦に作戦会議をする理由を説明すると、吉彦は頷いた。

「会議の議題は」どうやって学校から脱出するか」だ」

俺は作戦会議の議題を発表した。

「なあ、どうやってこの学校から脱出するんだ？」

「それを、これから話し合っただろ。つか、何でお前は人の話を聞かないんだよ・・・」

人の話を聞かない”アホ”の祐介の質問に俺は呆れながら答えた。

「じゃあ早くやるっぜ」

と祐介が言った。

何だよその態度は、何様だよお前は・・・

「まあいい、じゃあこれから、”どうやって学校から脱出するか”の案を出してくれ。」

案を出す時は手を挙げてからにしてくれ」

俺は皆にそう言った。

すると吉彦が手を挙げた。

「扉が駄目なら、窓から出れば良いと思うんだけど」

吉彦は案を出した。

「なるほどな。で、詳細は？」

俺は吉彦の出した案の詳細を聞いてみた。
何故なら、脱出するのだから詳しい詳細を聞かないと色々危険な事になるかもしれないからだ。

詳細があまりにも無謀すぎるのも困るのも理由の一つだ。
例えるなら、いきなり「バ オハ ード？でミ ・ジヨ ビ チの様に建物の壁をかけ降りろ」と言われた様なものだ。

あの技は俳優でさえ難易度が非常に高いだろう。それを俺達高校生が出来ると思うか？勿論無理だ。そうゆうアホみたいな案を出されては困るから俺は詳細を聞くんだ。

詳細があまりにも無謀過ぎる内容だったら、俺は即却下する。

「其処にあるカーテンをロープ代わりにして下の階に降りるんだ。確か下はコンピュータールームだったから色々と情報を集められるからな」

と吉彦はカーテンを指しながら、自分が出した案の詳細を話した。

「おお、吉彦にしてはまともな案が出たな」

俺は意外とまともな案を出した吉彦に驚いた。

「お前は一体俺をどう見てるんだ？」

「そんなの、レツ リ大好きで出来もしない事を出来ると信じてる空想野郎だろ？」

カーテンを使って校舎の壁をかけ降りるとかいうバカげた案だと思

「っただけどなあ・・・」

「く、空想・・・野郎・・・」

俺は吉彦のイメージを言うとアイツはひどく落ち込んでいた。

「アンタって、さりげなく最低な事言うのね」

「しょうがねえよ。光治は毒舌だからな」

「光治君って中1の時から毒舌になったんだよね」

鈴木が俺に軽蔑の視線を浴びせながらそう言うと祐介と綾香も賛同した。

さすがに、これだけは自分も否定出来ない事だ。

「吉彦、さっきのは悪かった。」

「あ、ああ気にすんな」

俺が謝ると吉彦は許してくれたけど・・・物凄い落ち込んでいる。

「じゃあ会議の続きをやるぞ」

俺は会議を続ける事にした。何故なら吉彦を立ち直らせる事も大事だけどそれは会議が終わった後でも出来るから俺は会議を進める。

「じゃあ、カーテンを利用して下の階のコンピュータールームに行くという案に対して何か不満がある奴はいるか？」

俺が皆に聞くと、鈴木が手を挙げた。

「なんだ？」

「確かにカーテンで下の階に行くのは良い案だけど、下に行くときは武器が持てない筈よ、下に行った人はどうやって武器を受け取るの？それにもしも中にゾンビが居たらどうするの？」

確かに鈴木と言う事は納得出来る、下の階に行けても武器を受け取る方法が無ければ丸腰で脱出しないといけないし中にゾンビがいたら武器を受け取る前に食い殺されるだろう。

「じゃあお前が最初に行く事になるな」

「ええっ！？な、何でアタシが最初に行かないといけないの！？」

俺がそう言つと鈴木は驚きながら聞いてきた。

「だつてお前は木刀を持っていて、ソレを腰とかにさせるだろ？」

と俺は理由を言った。

勿論ふざけているわけじゃない。武器を携帯出来るという事は下に降りて武器を受け取ってる時にゾンビに喰われないという事だ。

「だからって何でアタシが、戦闘のプロの隆二とか木刀を持たせて行かれれば良いじゃない」

「戦闘のプロって、俺は何時から戦闘員になつたんだ・・・（小声）」

鈴木は自分一人で行く事に納得出来ないのか反論してくる。隆二が小声で何か呟いているが今はそれどころじゃない。

さてと．．．どうやって納得させるかな．．．言葉だけじゃ納得しなだろうしなあ．．．

そうだ！色々な意味で危険かもしれないけどやるしかない！

「分かった、なら俺も一緒に行こう」

「『はあ！？』（ええっ！？）『』」

俺が言った事に祐介、吉彦、綾香、と鈴木本人が驚いた。

「いつも鈴木と”夫婦”と言われるのが嫌いな俺が鈴木と二人で行動するなんて普通は思わないだろうな。俺だって正直嫌だけど、今は時間が限られているから我慢してやった事だ。つか、吉彦の奴いつの間にか立ち直ってるし。」

「な、なな、何でアンタがアタシとい、一緒に．．．？」

鈴木はやっぱり動転している。

「まずいな、このままだと足手まといになっちまうな．．．、やっぱり変な方向に進んでいくよなあ．．．仕方ない！」

俺は鈴木目の前に来て彼女の肩に手を置いた

「なあ鈴木」

「は、はい！、な、何ですか！？」

俺が呼ぶと鈴木は返事をした。何故に敬語？

「いいか、俺は必ずお前をゾンビの餌にはさせない。俺がお前を守るから」

と俺は言った。

鈴木は顔を真っ赤にして下を向いた。

正直に言う、死にたい位恥ずかしい。穴があつたら入って生き埋めになりたい位恥ずかしい。

何で！？あんな格好付けた事を言っただけで恥ずかしいと思つて決まってるだろ！！

鈴木はしばらく下を向いたままだったけど、少しだけ顔を上げて上目遣いながらも

「も、もしアタシが・・・噛まれたら・・・あ、アンタも一緒にみ、道連れだからね・・・／／」

「グバアツ！！」

と顔を赤らめながら言った。

そして、俺と祐介と吉彦は口から血を吐いて倒れた。すぐ近くでは隆二が”面白そう”と言ってるような顔をしてた。

「ちよ、ちよつと大丈夫なの！？」

と鈴木が俺に駆け寄って来て言った。

「あ、ああ大丈夫だ。

まあ、約束は守るさ」

「そ、そう・・・」

約束ちゃんと守ってよね」

俺は口の血を拭いながら答えると、鈴木はまた何時ものようにツンツンしだした。

しかし、アイツにあんな秘密兵器を隠していたなんて・・・しかも自己紹介の時の綾香より強力だ・・・

ツンデレってのは時に恐ろしい程の破壊力があるのか・・・
祐介と吉彦は綾香が診てるから大丈夫だな。

「じゃあ次は、武器をどうやって運び出すかだ。何か案がある奴は？」

俺は皆に聞いてみたけど誰も手を挙げない。

まあ、手が拳がらないのは普通だな。武器を運び出すかというからにはミスってしまうと丸腰状態になってしまうから、ちゃんとした案を出すために考えてるんだろう。
しばらくすると

「一つだけ案がある」

と隆二が手を挙げてそう言った。

「何だ？」

「なに簡単な事だ。」

誰かが武器を落として下の階にいる奴がソレをキャッチするんだ」

隆二は俺を見ながらそう言った。

「なるほど、じゃあ誰がソレをやるんだ？」

俺が聞くと、皆が一斉に此方を見た。

「……………お、俺!？」

「「当たり前だろ」「」

俺が驚くと吉彦と祐介がそう言ってきた。

恐らく、コレは俺が何言ったって無駄なんだろうなあ……………

「……………ハア、分かったよ。俺に拒否権は無いんだろ? やってやる
よ」

俺は諦めてそう言った。

「じゃあ、さっさと始めるぞ。光治、さっさとしろ」

「ああ……………って、何で隆二が指揮ってるんだよ」

「万が一の為だよ」

俺が聞くと、隆二が縁起が悪い事を言ってきやがった。

「ったく……………まあ良いか、鈴木早く準備s「光治、早くしなさい
よ」って早!」

俺は鈴木に”早く準備しろ”と言おうとしたら、既に準備していて
逆に言われたから、俺もすぐに準備をした。

「じゃあ行くか」

「そうね」

俺はギターを片手に鈴木と窓に向かった。
カーテンを外そうとしたら、いつの間にか外されていた。

「あれ、誰がカーテンを外したんだ？」

「僕が外しました」

「おおそうか、ありがとな」

どうやら、幸助が外したらしいから俺は礼を言った。

「じゃあ、今度こそ行くか」

「そうね、今度こそ」

第4話 作戦会議！そして作戦決行！（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております

キャラクター紹介（前書き）

2011・12・4
一部編集、追加しました

キャラクター紹介

・片岡光治

(かたおかこうじ)

八王子高校3年B組

黒髪で若干目にかかる位でちょっとつり目顔は中の上

毒舌で主にツッコミ役

オカルト系大好きの祐介と綾香のせいで、授業の合間は新鮮な空気を吸うために廊下に出ている。

本人曰く、「祐介と綾香とはただのクサレ縁」。

李奈との夫婦疑惑(?)のせいで色々と悩んでいる為、李奈と二人の前では”夫婦”は禁句になっている(言う顔面に渾身の右ストレートを放つ)。

ゾンビが現れてからは成り行きで、いつの間にかリーダーになっている

ファーストキスの相手は生徒会長の楓とで、ゾンビ発生の前日には、いつの間にか婚姻届を出されていて、楓と夫婦になっている
昔、両親を交通事故で亡くしている

武器

椅子 ギター バット

・佐藤祐介

(さととうゆうすけ)

八王子高校3年B組

茶色がかつた短い黒髪をしていて顔は普通

一応ゾンビの囷役

オカルト系が大好きで綾香と共に光治を色々悩ませている。

自前の双眼鏡でグラウンドにいる体操服姿の女子生徒を覗いていて、

教師達の悩みの種になっていた。

何回か光治と李奈の前で”禁句”を言ってしまった、殴られた事がある

武器

無し 椅子 バット

・佐々木綾香

(ささきあやか)

八王子高校3年B組

黒のショートヘアで顔は上の中

若干天然

祐介と同じでオカルト系

が大好きで二人で光治を悩ませている。

恥ずかしがりやで、人前で立って発表したりするのが苦手(光治曰

く「つい”カワイイ”と思ってしまう」)

武器

今のところ無し

・鈴木李奈

(すずきりな)

八王子高校3年B組

黒髪のロングで顔は上の中

剣道部主将でツンデレ

隆二とは幼馴染み

光治との”夫婦疑惑”に悩ませられている。

生徒会元副会長で楓とは知り合い

武器

木刀

・坂本隆二

(さかもとりゆうじ)

八王子高校3年C組

金髪で顔は中の上で非常に目付きが悪い不良

いつも授業をサボって学校屋上で寝ているかタバコを吸っている。校外ではよく他校の不良に喧嘩を売られて、その度にボコボコにしている。

此処等いったいでは最凶の不良だが学校内では不祥事はあまり起こさない。

武器

机 ギター バット

・田中吉彦

(たなかよしひこ)

八王子高校3年C組

全てにおいて普通

レツ リ大好きでベースのフーに憧れている。

自己紹介では必ずレツ リの事が出てきて、放っておくと2、3時間間は話続ける。

何回か光治と李奈の前で”禁句”を言ってしまい、殴られた事がある。

武器

ベース

・宮本幸助

(みやもとこうすけ)

八王子高校1年A組

黒髪のスーツ刈りで顔は普通

弱気な性格で自己紹介の時などは光治と李奈を（特に光治の方）とも恐れていた。

脱出直前でゾンビの餌食となり死亡

武器

無し 椅子 バット

・安岡光太

（やすおかこうた）

八王子高校2年A組

短い黒髪で顔は中の上

同学年の葵とは恋人関係にあつて、葵の自己紹介の時は彼女に変わつて紹介をした。

武器

無し 椅子 バット

・古林葵

（こばやしあおい）

八王子高校2年A組

黒髪のロングとショートの中間で顔は中の上

光太とは恋人関係にある。

あまり他人とは話さない性格な為、彼に自分の紹介をしてもらった。楓と光治を羨ましがっている（夫婦だから）

武器

今のところ無し

・吉田楓「片岡楓」

(よしだかえで「かたおかかえで」)

八王子高校の3年A組

黒髪のロングで学校一の美人

元生徒会長であり、学年首席の頭脳を持っていて、もっと上の高校からの推薦を受けていたが、光治と同じ学校に行きたいという理由で推薦を蹴って彼と同じ高校の入試をうけた

中学2年の時に光治達がいる中学に転校してきて、其処で彼に一目惚れして皆の前でキスをして「結婚してくれ」と告白した

それ以来、修学旅行や光治の自宅で夜中に侵入して全裸で彼の布団に入り込んで朝まで寝てたりしている

ゾンビ発生の前日に勝手に光治の家の印鑑を盗んで、勝手に婚姻届を出して夫婦になっている為、実際には”吉田楓”ではなく”片岡楓”となる

武器

バット

・巫女さん(仮)

学校から出た光治達が偶然神社で出会った女性

大和撫子の様な人

第5話 夫婦になれるのは女性は16歳、男性は18歳になってから（前書き）

先に言っておきますが、あともう一話まではゾンビは出ないと思います。

あと、PVが1000を越えてました。

こんなので読んでくださって、ありがとうございます。

第5話 夫婦になれるのは女性は16歳、男性は18歳になってから

今俺は鈴木とコンピュータールーム（以下”CP室”）のベランダに降りて来た所だ。

「じゃあぶっ壊してくれよ」

「ええそうね、任せといて……って何で鍵がかかっているのが前提なの!？」

おお、ノリツツコミか。鈴木も成長したんだな。

「冗談だよ。ちゃんと鍵がかかっているか調べるから」

俺はそう言って窓に鍵がかかっているのか調べた。幸いにも鍵がかかってないらしいから窓を開けた。

「よし、入るぞ」

「ええ」

そして俺と鈴木は中に入った。

「こ、これは……うっ!」

「酷いわね……」

と俺と鈴木は口を押さえながら呟いた。

中にはゾンビは居なくて、あちらこちらに死体が転がっていてどれ

も頭を潰されていてグロテスクな光景が広がっていた。恐らく、もう此処にはゾンビはいないだろう。

「この光景を除けば大丈夫そうだな」

「ええ、じゃあ早く上の皆を呼んできて」

「分かったよ」

俺はグロい死体だらけのCP室に鈴木一人を残して、ベランダに出た。

上から隆二が顔を出していたから俺はOKサインをだすと隆二は頷いてから顔を引っ込めた。

それから、隆二以外がベランダからCP室に降りて来た後、俺は隆二が落としてきた武器をなんとか全てキャッチした。

そして隆二が降りてきてから全員がCP室に居ることを確認してから、窓を閉めて鍵をかけた。

「しっかし、酷えなコレは・・・」

「まったく、気持ち悪すぎる・・・」

「吐き気がするな・・・あつ、もうムリ・・・ヴェエエエ」

隆二、祐介、吉彦の順に呟いて、そして最期に吉彦が吐いた・・・つて、あのバカ！掃除するのに（死体や床に落ちている脳や肉片等を部屋の隅に寄せるだけだが）何ゲを追加してるんだよ！

「とりあえず、死体とかを部屋の隅に動かすぞ。」

吉彦は自分のゲ もかたせよ」

「あ、ああ……」

吉彦は蒼白い顔で答えた。

「じゃあ、女性陣はそこら辺で休んでてくれ」

「うん、分かった」

「そうね、さすがに疲れたわ。

じゃあ頼んだわよ」

「……コクッ」

綾香、鈴木、はそう言って、2年の葵は頷いて死体掃除の邪魔にならない所に移動した。

「よし、じゃあ始めるか幸助と光太はあまり無理するなよ」

「「はい、でも、やれるだけやってみます（無理しない程度に頑張ります）から大丈夫です」」

お、なかなか良い返事だな。あの祐介と吉彦のバカコンビとは比べ物にならないな。

「そっか、じゃあ始めるかな。

祐介、吉彦、サボるなよ？」

「「何で俺だけ!?!」」

祐介と吉彦が驚いていたが、俺達は無視して死体掃除を始めた。

「さてと、まずはアレからにするか」

俺が一番近くにある壁に寄り掛かっている女性の死体に近付いた。近くにはバットが転がっていた。

「おっ、バットか後でもらっておこうかな」

と小声で言い俺は死体を担いだ。すると

「スー……スー……」

と静かに寝息を立てていた。

「生き残ったのか……」

俺はそう呟いてからゆっくりと女性を床に降ろした。

「皆来てくれ、生き残りが居たぞ」

俺は皆を呼んだ。

すると皆が此方に来た。

「アンタ、まさか変な事してないでしょうね」

鈴木がいきなり、とんでもない事を言ってきた。

「してねえよ！何で真っ先に変態に言うような事を言っただお前は」

と俺が言つと

「誰が変態だ！」

祐介が反応した。

「お前は”変態”って言葉が出る度に出てくるな！」

俺は祐介を黙らせた。

「その娘、嘸まれてるかもしれないから、一応起こした方が良く
思うぞ」

「そつだな」

隆二に言われた通りに俺は眠っている女性を起こすために揺すりな
がら

「おい起きろ、大丈夫か」

と呼び掛けると

「うつ・・・うつ・・・」

「おお、起きたか。

どこか怪我はないkってうお!？」

起きたと思つたらいきなり女性はいきなり俺を掴んで引き寄せた。
今は誰も武器を持っていない。

クソッ！ここまでか！
俺は嘔まれる事を覚悟した。

・・・？

何時まで経っても激痛がはしらない。

それどころか・・・何だ？この唇に伝わるこの感触は？

ゆっくりと目を開けると、そこには女性の顔が目の前にあった。

「！？」

俺は驚いて直ぐに女性から離れた。

周りには、いきなりの事で驚いている皆がいた。特に、鈴木と綾香は顔を真っ赤にした。

「な、何だ！？何があったんだ！？」

俺は皆に聞く。

「な、何って、アンタ本当にわからないの？」

顔を真っ赤にした鈴木が逆に聞いてきた。

「あ、ああ」

「何だ？私達は夫婦だぞ。アレくらい普通だろ？」

俺が答えると女性の声が出た。

その声の主は、さっきまで眠っていた女性だった。

「・・・か、楓（楓ちゃん）！？」「」

「会長!？」

俺と祐介と綾香と鈴木は驚いた。

あつ、そういえば、鈴木は生徒会副会長だったな。

「久しぶりだな友人達、そして私の最愛の夫」

「おい、俺が何時お前と夫婦になったんだ？」

「おい!ちよつとまて!」

吉彦が何か興奮しているようだ。

「どうした?」

「どうしただと!？何でお前が生徒会長とキスしてんだ!？」

俺が聞くと吉彦は若干キレていた。

つて、さっきの感触はキスだったのか!？

「当たり前だろ?何故なら私と光治は夫婦なんだ。キス位は普通じゃないのか？」

楓は俺の腕に抱きついて勝手に魅せつけている。

つか、胸が当たってるんですけど・・・

「ふ、夫婦だと・・・」

光治デメエ!両手に女を羽生らかせやがって!」

「俺は誰とも付き合ってねえよ！勝手な誤解すんじゃないねえ」

俺はなんとか誤解を解こうと必死になっている。
だが、その横で

「何を言ってるんだ光治は。」

この前の修学旅行で朝まであんな事をした間柄だろ？」

と楓がまた変な事を言ってきた。

「アレはお前が勝手に俺の布団に潜り込んでたんだろっか！つか、あの時俺に何してたんだ！？」

「自分でやっておきながら光治は何を言ってるんだ」

おい、俺は何もしてねえぞ・・・

「へえ、やっぱりアンタって変態だったのね」

鈴木が微笑みながら（勿論目は笑っていない）木刀を構えてきた。
クソッ！もう我慢の限界だ・・・

「楓！いい加減にしろ！」

「っ！」

俺は我慢の限界にきて壁に叩き付けた。
楓は叩き付けられて顔をひきつらせた。

「わ、わりい楓、ついカツとなって」

俺は自分のしたことに気付いて、直ぐに謝った。

「いいんだ。夜まで待てなかったんだろ？気にするな」

良かった。気にしてないのか・・・って

「違えよ！何が「夜まで待てなかったんだろ？」だよ！」

「なあ光治、詳しく聞かせてもらおうかな？」

「そうね、アタシも色々知りたいし」

吉彦と鈴木がそれぞれベースと木刀を構えながら歩み寄って来た。

「分かった、話すから武器を下ろせ！」

俺が全てを話す約束をすると、二人は武器を下ろした。
噛まれてもないのに頭を潰されるのは御免だからな。

「よし、じゃあ早く話せ」

「洗いざらい、吐いてもらおうよ」

「ああ分かったよ、あっ、その前に・・・楓、どこか噛まれてないか？」

俺は過去を話す前に楓に噛まれてないか聞いた。

「ああ、今日も夢で光治に軽く首を噛まれたな」

「夢の話じゃなくて現実だ！」

何時もどんな夢を見てるんだコイツは。

「ああそつちか・・・大丈夫だ誰にも噛まれていない」

楓は何故かちよっと残念そうに答えた。

「本当に噛まれてないな？」

一応俺はもう一度聞いてみた。

前に祐介に無理矢理見せられたゾンビ映画で噛まれてないと嘘をついてた奴がいた事を思い出した。

「誰にも噛まれてないと言っただろ。お前は私を信用できないのか？」

「いや、念のためだ」

「なら、私が全裸になって噛まれてないと証明しようか？」

「もう良いよ」

俺は呆れながら答えた。

「さてと、じゃあ話すかな。楓と出会ったのは、中2の時だ」

俺は楓と初めて出会った時、つまり、全ての始まりの事を話した。

〜中学2年の春〜

「吉田楓だ。」

茨城から此処に転校してきた。よろしく」

と転校生が自己紹介をした。つか、さっきから此方の方はっかり見
てるな・・・

すると後ろに座っていた男、祐介が肩を叩いてきたから俺は振り向
いた。

「なあ光治あの転校生、絶対俺の事見てるぞ」

いきなり何を言ってるんだコイツは・・・

「あっそう、良かったな」

俺はそう言って前を向いた。

確かにあの転校生は此方の方ばかり見てるけど、祐介はまず無いな。

「では吉田はあそこの空いてる席に座れ」

と担任が空いてる席を指しながら言った。

すると転校生はいきなり担任の手を遮って

「いえ、良いです」

と言って俺の隣に座っている女子生徒の前に立った。

「すまないが、私にその席を譲ってほしい」

と頼んだ。

コイツ、何考えているんだ？

「は、はい」

「そうか、ありがとう」

女子生徒がはいと答えると転校生はニコリと微笑んで礼を言った。そして、女子生徒が空いている席に移動すると転校生はバックを椅子に置いて今度は俺の前に来た。

「何だ？」

「お前、名前は？」

「片岡光治だ」

名前を聞いてきた為、とりあえず名乗ると転校生はいきなり両手で俺の顔を軽く掴んで一気に引き寄せてきた。

「うおっ!?!」

いきなりの事で俺は何もできなかった。

すると、唇と唇が重なった様な感触がした。

1秒位でその感触は消えた。

「片岡光治、私はお前に一目惚れした。結婚してくれ」

転校生は顔を赤くしながら、とんでもない事を言ってきた。しばらくすると

「『『『『ええー！？』』』』」

「はあ！？」

とクラスの全員が驚いた

。勿論俺もだ。

おかしいだろ、恋愛ってのは普通はまず恋人からでそこから結婚に発展するか別れるかなのに、コイツのは何だ？いきなりキスして結婚しろ？色々和省きすぎだろ。

この日、俺はファーストキスを訳も分からない状態で奪われて、殆どの男子から非難の視線を浴びさせられて、色々大変な毎日になった。

（現在）

「あの日から俺は色々大変なんだよ。修学旅行で浴場で一人になった時に何故か入ってるし、自宅で朝起きたら、何故か全裸の楓が隣で寝てた事もあったし、まあコレはもうやってないけどな」

「なるほどね、アンタも大変なのね。」

ま、まさかファーストキスのあ、相手が、か、会長だったなんてね」

俺が過去の事を話すと鈴木は何故か動揺していたが理由は聞かないでおこう。

「実はな、一つだけすまないと思ってる事があるんだよ」

「何なの？」

俺が一つだけすまないと思ってる事を話すと鈴木が聞いてきた。

「アイツ本当は此処より上の高校に推薦を受けてたんだけど、わざわざそれを蹴って此処の学校に受けたんだ。それに対して俺はすまないと思ってるんだ」「確かに会長の学力ならもつと上の高校に行けたわね」

俺の言った事に鈴木も同感のようだ。すると楓が鈴木を叩いた。

「気にするな李奈、私はどんな高校でも光治さえいればそれで良いんだ」

何だろう、喜んで良いのか悪いのか分からねえや。

「そうだ光治、此処から脱出出来たらファーストキスをやり直しても良いぞ。アレは私も納得できてないまからな。それと、またあの時の様に一緒に寝てやっても良いぞ。勿論全裸でな」

さっきの話、全部聞こえてたのか・・・

「いや、アレはもういい。つか、何で俺と一緒に寝てくれと頼んだ様な言い方をすんだ！それに、さっきキスしたじゃねえか！なんでやり直す必要があるんだ！？」

「そんなの私の本能が勝手にそうさせてしまったからに決まってるだろう。夫婦ならば両者が意識してやらないとな・・・ん？そ

うだ、今の思いで話で大事な事を思い出したぞ」

話の途中で楓が何かを思い出したようだが、何か物凄く嫌な予感がする……」

「な、何だ？」

俺はとりあえず聞いてみる。ああ、とても嫌な予感する。

「なあ光治、式は何時あげるんだ？」

「……はい？」

式をあげる？何の事だ？

「だから結婚式だ。何時私達は結婚するんだ？もう婚姻届は出したというのに」

結婚式？婚姻届？何の事だ？とりあえず聞いてみよう

「なあ楓、俺はお前と結婚する約束した覚えがないんだが……それに、勝手に俺とお前の婚姻届を出したのか？」

俺は一応聞いてみた。

「何だ忘れたのか？まったく、光治は忘れやすい性格なのか？まあそれよりも婚姻届の事だが、正直お前に内緒で出したのは、すまないと思ってる。だが、お前に見つかると処分されるから、仕方なくお前の家の印鑑を盗ってしまったんだ。許してくれ」

「ああなるほどね、じゃあ仕方ない・・・訳ねえだろ！何勝手に俺達を本当に夫婦にしてんだよ！それに勝手に人の家の印鑑盗んでじゃねえ！」

「まったく、ゾンビが現れなかったら、今頃私達は結婚式の予定を話し合っていたというのに、光治も辛いのか」

駄目だ、まったく俺の話聞いてない様だからからこれ以上何か言うのは止めよう。それよりも・・・

「もういいから、女性陣はとりあえず掃除の邪魔にならない所に移動してくれ」

「光治は素直じゃないな。私と結婚したいならそう言えば良いのに」

「早く行け！！」

俺が怒鳴ると楓は黙りこんだ。

あっ！ヤベエ、またついカツとなっちった。

「わ、わりい楓、ついカツとなつて」

「いや、さすがに今回は私が悪かった」

今回はって、その何時もは悪くないみたいな言い方なんなんだ・・・

「分かった。じゃあ掃除の邪魔にならない所で休んでくれ」

さっきはキツイ口調で言ったから、今度は優しい口調で言った。

「すまないな」

楓はニコリと微笑んでから鈴木達と死体が無い所へ移動した。

「どつりでモテる訳だ」

「隆二、どうゆう事だ？」

隆二の言った事が分からないから聞いてみると、「何でもねえよ」と言つて近くにあつた死体の所に向かった。

気になるが今は死体を片付けるのが先だな。

俺はとりあえず一番近くにあつた死体の所に向かった。

そして死体等を隅に片付けた後、皆に楓の自己紹介をする事にした。

「吉田楓だ。」

クラスは3年A組で元生徒会長だ。ちなみにファーストキスの相手は其処にいる光治とで、昨日に婚姻届を出して今は夫婦だ。よろしく」

楓は皆に自己紹介をしてニコリとした。

笑うと可愛いんだけどなあ……でも、アレのせいで色々大変なんだよなあ……

「……楓先輩、羨ましいです」

と今まで黙っていた葵がやっと喋った。

羨ましいって、こっちからすれば物凄い迷惑なんだけどな……

「じゃあ楓の紹介が終わったから情報を集めるか」

俺は皆にそう呼びかけた。

第5話 夫婦になれるのは女性は16歳、男性は18歳になってから（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

あと、キャラクター紹介に新キャラを追加しました。

第6話 一体俺達、この先どうなるの？(前書き)

本当はゾンビは出さないつもりでしたが、ちょこっと出してしまいました。

第6話 一体俺達、この先どうなるの？

「じゃあ、とりあえず情報収集でもするか」

と俺は皆に聞こえる様に言った。

「そうね。」

何で、ゾンビが現れたのか知りたいしね」

どうやら鈴木は賛成のようだ。

「どのくらい被害を受けてるかも知りたいな」

隆二も賛成か・・・まあ、皆も同じ事を考えてるだろうから、良いかな。

「じゃあ早速、情報を集めるか」

俺はそう言っただけで近くのパソコンの所へ行って電源を入れた。

そして、Ya o o J P Nを開いた。

「おお、凄いな。」

皆見てみるよ」

俺がそう言っただけで皆はYa o oのニュース記事に釘付けになった。

「す、凄いな・・・」

祐介は思わず息を飲む。

「これは・・・こんな事が有り得るのか？」

楓はどうやら信じられない様だ。

まあ無理もないな。何せ記事の内容は

「2012.12/10.09:25

ヨーロッパ州、アメリカで人が突如凶暴化！政府は軍による事態の鎮圧を発令するが、未だに原因は不明」

「2012.12/15.12:02

アメリカ、イギリスのCDCから、あるウイルスが何者かによって盗まれた事が発覚！英、米政府は「バイオテロの可能性がある」と発表」

「2012.12/19.15:27

国立感染症研究所から”レベル4の中で最も危険なウイルス”が盗まれたいた事が発覚！警察はバイオテロの可能性もあるとして犯人を捜索中」

「2012.12/22.08:01

関東地方でも人が凶暴化！政府は警察による事態の鎮圧を発令」

といった、要するにゾンビ関連の記事ばかりで、十日位前にイギリスとアメリカで今と同じ事が起こり始めた様だ。

「これは、近いうちに世界中で起こるかもしれない・・・」

「同感だ」

俺の思ってたことを隆二も思ってたらしい。

「な、なあ、俺達この先どうなるんだ？」

吉彦がかなり動揺した様子で聞いてきた。

「吉彦、はっきり言っておくが……このままだと人類は皆ゾンビになるだろうな」

俺は自分が思っていた事をそのまま答えた。

「そ、そうか……」

まずいな……吉彦の奴、物凄く動揺してやがるな。
どうするかなあ……そうだ！

「吉彦、とりあえずレッ　リ聞いて落ち着け」

俺は吉彦を落ち着かせる為にレッ　リを聞く事を薦めた。
すると吉彦は

「ああ……」

とだけ言って、制服からイヤホン付きのiPodを取り出してイヤホンを耳にかけた。

「吉彦君、物凄く動揺してるけど大丈夫かなあ」

綾香が吉彦を心配そうに見ている。

・・・あれ？全然動揺してないんだけど・・・何？この騙された感・・・
まあ、とりあえず教えとくか。

「CDCってのは、アメリカとかにある疾病管理予防センターの事で、そこに危険な細菌やウイルスを厳重に保管、そして研究しているんだ。」

国立感染症研究所は、その日本バージョンって訳だ。分かったか？」

俺は綾香にCDCと国立感染症研究所の事を簡単に説明した。

「へえ、光治君は詳しいんだね」

「いや、実際には祐介に「未知のウイルスによる感染」を扱った映画とかで出るから覚えとけ」と言われて無理矢理覚えさせられた事だからな」

綾香に褒められたけど、俺は知ってる理由を話した。

「あ、そうだよ思い出したよ。」

CDCって言葉がR C / ク ラン イン2で出てきたんだよ」

・・・はい？

綾香が何か思い出した様だけど、俺にはサツパリです。
何か祐介がいきなり肩に手を置いてきた。

「な、覚えてて正解だったろ」

やかましいわバカ！

なんなんだその？は！？すげえムカツクんだけど！

「ねえ、これからどうすんの？」

このやり取りに呆れたのか鈴木がこの先どうするか聞いてきた。

「とりあえず、此処に居ても直ぐに死ぬから学校から出る」

「それから？」

「それから……ええっと……分からねえ……」

「はあ！？アンタ、それ本気で言ってる訳！？」

鈴木に怒られてしまいました……

「ま、まあ、とりあえず食料を確保しながら安全な場所を探すから大丈夫だ」

「本当に大丈夫なの？」

頼む！これ以上ダメ出ししないでくれ！

俺の精神がボロ炭の様に崩れ落ちてしまう！

「まあ李奈、そのくらいにしといてやれ」

丁度良いタイミングで楓が来てくれた。

ナイス楓！と俺は心の中で叫んだ。

「でも会長、コイツ後の事を何も考えてないんですよ！」

すると鈴木が楓に意見してきた。

「成る程、だけど李奈、こういう時は後の事よりも今、どうやって脱出するかの方が最優先じゃないのか？」

「確かにそうですけど・・・」

さすがは元会長だ。

あんな短い言葉で鈴木を納得させてるぞ。

「まったく、お前は何時も先の事ばかり気にしすぎで、今どつするかとなると全然駄目だからな。」

だから何時まで経ってもお前が好き」

「分かりました！分かりましたから、それ以上先は言わないでください！！」

楓が何かを言いかけた途端、鈴木は顔を真っ赤にして叫んだ。
何か知られたくない事があるんだろうな。

そんな事よりも・・・

「なあ楓、なんで鈴木はお前に敬語を使ってるんだ？」

俺は鈴木と楓の会話で気になった事を聞いた。

「なんだ光治、まさか浮気か？」

「違いよ！てゆうか、何で俺達が夫婦になってんだよ！！」

「さっき話したじゃないか。昨日婚姻届を出した」って、まった

く光治は物忘れが激しいな」

そうだった。

楓に勝手に婚姻届を出されて夫婦になっていたんだ……
とりあえず……話を戻そう。

「浮気じゃねえよ。

ただ、同じ年なのに何で敬語を使ってるか気になったただけだよ」

「実のところ、私にも分からないんだ」

アレ？楓自身も分からないのか？
じゃあ仕方ないな。

「それよりダーリン、これからどうするんだ」

楓がこの先どうするか聞いてきた。

「そうだな、とりあえず野球部の部室に行つてバットを手に入れてから、なるべく無駄な戦闘を避けながら脱出するつもりだ」

「無駄な戦闘を避けるか……確かに、死亡する確率が下がるから良い案だな」

おっ、ちょっとした案なのに結構評価が高いな。

そうだ、一言言っておかないと

「そうだ楓、その”ダーリン”だけは止めてくれ。吐き気がするから」

「そうか、それはすまなかった。もう言わないよ」

実際吐き気はしないけど、凄く嫌な気分になるからな。
楓の性格上、もう二度と言わないだろう。

「あつ、そういえば光治」

「何だ？」

楓が何かを思い出したらしく俺を呼んだ。

「私が持っていたバットを知らないか？さっき起きてからずっと見当たらないんだが・・・」

バット？・・・ああ、俺がさっき見つけたアレか

「それなら、お前が眠ってた所辺りにあったぞ」

「そうか、すまないな」

俺が教えると楓は礼を言ってから自分がさっきまで眠っていた所に向かった。そして、楓と入れ代わる様にして光太と葵が来た。

「・・・楓先輩と仲が良いんですね」

「ああ、まあな」

「・・・夫婦ですか、羨ましいです」

うん、コレって喜んで良いのか？悪いのか？・・・って、あれ？

「なあ、まさかそれを言う為だけに二人で来たわけじゃないよな？」

俺は気になった事を聞いてみた。

今”はい”と答えたら多分ぶちギレるな俺。

「違いますよ。

ただ、扉か窓のどっちから出るのか聞きに来ただけですよ」

ああ、その事か。

「それは、皆を集めてから話すよ」

俺がそう言つと二人は

「そうですね」

「……夫婦なんて羨ましいです」

と言つて戻つていった。つか葵、どんだけ羨ましがってるんだよ・

・

そつえば、隆二はさっきから座禅組んで何してるんだ？

「待たせたな、私と離れて寂しかったか？」

俺が気になって調べに行こうとした瞬間、バットを持った楓が戻つて来た。

「別に寂しくはないけど、何で俺がお前にデレデレみたいな言い方をするんだ？」

「何だ？違うのか？」

「違うわ！俺が何時お前がそう思う様な言い方したんだ！？」

「おかしいな・・・アレは夢だったのか・・・」

ああ、夢の話か・・・なら、あんな事を言ったのか納得できる気がする。

「もういい、それよりそろそろ行くか」

「そうだな」

「皆！そろそろ学校からおさらばするぞ」

俺は皆に聞こえる様に言った。すると一部の女子と隆二を除いたら人が自分の武器を持って

「……………待ってたぜ（待ってたわよバカ！）（待ってましたよ）
（……………）」

と同時に言った。

あれ？皆何でこんなにヤル気満々なんだ？
吉彦がいつの間にか復活してるし。

「……………」

お、隆二が起きたようだな。

「もう行くのか？」

と隆二が俺に聞いてきた。

「ああ。

そういえば、お前やけに静かだったけど、座禅組んで何してたんだ？」

俺は答えてから気になった事を聞いた。

「ああ、寝てた」

寝てた？ああ、そうですか……

「で、何処から出るんだ？窓か？扉からか？」

「そうだな……とりあえず前は危ないから窓からでる」

バンバンバン！

窓が叩かれる音がした。ゾンビが来たんだろう。

「と思ったけど、窓の方にゾンビが来たから扉から」

バンバンバン！

どうやら、ゾンビがやって来た様だ。

「も出れないな」

隆二が続きを言ってくれた。
ぶちギして良いですか？

「ねえ光治、どうするのよ」

鈴木が聞いてきた。

勿論答えは一つに決まってる。

「さあ……どうなるんだろうな俺達」

第6話 一体俺達、この先どうなるの？（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第7話 マジで不幸すぎるんだけど……（前書き）

今回はいつもより若干短いです。

第7話 マジで不幸すぎるんだけど・・・

「俺達、一体どうなるんだろう・・・？」

俺は皆にとりあえず聞いてみた。

何故って？そりゃ、窓と扉と言う2つしかない出入口をゾンビ塞がれたんだぞ！こんな事、普通に言いたくなるわ！

「知らないわよ。」

むしろ、アタシが知りたいわよ」

唯一鈴木だけが答えてくれたけど、俺と同じ事を考えていた様だ。

そして皆は黙りこんで、聞こえるのはゾンビが窓と扉を叩く音だけになった。

「やるしかないな」

隆二が口を開いた。

「やるって、何をやるんだ？」

俺はとりあえず聞いてみた。

「窓と扉が破られるまでは時間があるから、どっちか片方を開けて中にゾンビ達を入れて、ソイツらをぶっ潰せばいいんだ」

「かなり危険だけど、この際仕方ないか。
で、誰が開けるんだ？」

隆二の危険な案に仕方なく賛成して誰が開けるかを聞くと、一斉にこっちを見てきた……って俺!?

「お前らは目で俺に」さっさとゾンビに喰われて死んじまえ!」つて言ってるのか!?

「わがまま言ってる場合じゃないだろ。早くどっちか開ける」

隆二が殺気を込めながら言う。

隆二……そんなの無茶苦茶理不尽だろ……俺に拒否する権利は無いのかよ……

「わかったよ……」

俺は諦めて窓に向かい、そして窓に手をかけた。何で窓にしたかって?なんとなくだよ。

「よし開けるぞ、期を引き締めろよ」

俺が皆に言うと、皆は自分の持っている武器を構えながら頷いた。ちなみに皆の(俺自身も含めた)武器は

椅子：幸助、光太、祐介

ギター：隆二、俺

ベース：吉彦

木刀：鈴木

バット：楓

武器なし：綾香、葵

となっている。

そして俺は拳二個分位の隙間を開けた。

「うおっ！」

俺は開けた隙間から無数のゾンビの手が出てきたから直ぐに下がって、自分の武器であるギターを持って構えた。

窓の隙間が広くなっていき、徐々にゾンビのグロテスクな顔が見えてきている。

生前に眼球を喰われたらしいゾンビや顔の骨が露出してる奴もいるし、唇が無くなっていて歯が見えてる奴もいた。

そして、その内の一体が窓から入って来た。

それを拍子に次々と他の奴らも入って来て、こっちに向かって歩いてきている。

「よし、行くぞ！」

俺がそう言って駆け出したと同時に隆二、鈴木、楓、吉彦が駆け出す。

俺が一番近くに居るゾンビの頭を狙ってギターを横に振った。

ゾンビは少し吹っ飛んで倒れたが、まだ動いているが、そこに椅子を持った祐介が来て倒れているゾンビの頭に椅子の足の部分を降り下ろした。

グシャッ！

と音がしてゾンビは動かなくなった。

ゾンビの頭からはグシャグシャになった脳が流れ出ていた。

隆二達は次々とゾンビの頭を潰していつていた。

あれ？隆二は俺と同じギターなのに何で一撃で倒してるんだ？
って、そんな事考えてる場合じゃないか。

俺はまた近くに居るゾンビにギターのフルスイングをお見舞いした。

グシャツ！

と頭が潰れる音がしてゾンビは倒れた。

一発で倒せると何か気持ち良いな。

三体目のゾンビを倒そうとしたが、もう既に”窓から来た組”は全滅していた。

俺が倒したのを含めた10体のゾンビの死体（既に一回死んでるけど）がそこらに転がっていた。

「よし、じゃあ早く此处からおさらばするか」

俺達は窓からベランダに出た。

そして今はベランダを歩いていて、その後何も起こらずにどっかの教室に入った。

え？何か起こってほしかった？・・・フザケンナ！こっちは生と死の狭間を歩いてる様なもんなんだぞ！

そして、教室の扉を開けて廊下を走って、階段をかけ降りて、またかけ降りてってようやく一階についた。

「あれ？そういえば、さっきからゾンビ達が見えない様な」

俺は、ふと気になった事を言った。

「ゾンビが居ないなら、それはそれで良いじゃない」

「あのなあ鈴木、確かにゾンビが居ない事は良いことだけど、逆に何か気になるだろ」

「確かにちよつと気になるけど・・・」

「何してるんだ、早く来いよ」

隆二が俺達を呼んでいるな・・・って、あれ？俺達止まってるたの？

「お、おい早く行くぞ」

「え！？あ、うん」

何か鈴木の返事が曖昧だったが、そんなのは一々気にしてられない。そして俺達は昇降口で靴を履き替えて外に出た。

あとは、部室に行ってバットを手に入れて校庭を突っ切って行くだけだ。

「よし、早く部室に行こう」

俺達は部室に向かって行った。

そして、その途中でゾンビが三体出てきたからとりあえずSATUGAIして野球部の部室前にやって来ました。

「鍵は・・・ラッキー何故か掛かってないぜ」

「この学校って、大丈夫なのか？」

祐介は鍵が掛かってない事に大して呆れている。

「とりあえず中に入るかな。そうだ楓、ちょっとバット貸してくれないか？」

「別に構わないが」

「そうか、サンキュー」

俺は楓が使用していたバットを借りて中に入って、偶然中で食事中心だったゾンビの頭を潰して、ついでに、喰われた奴（もう死体だが）の頭も潰しておいて部室内にあった全てのバットと何か使えそうなエナメルバット2つを取って部室から出た。

「じゃあ皆で分けるか」

俺はそう言って吉彦、鈴木、綾香、葵を除いた6人（自分を含めた）で分けた。

それでも数本残ったからバックに入れて綾香と葵に持たせた。

「後は、校庭を突っ切るだけだな」

俺達は校庭に向かった。

あとは突っ切るだけだと思っていたが、校庭を見た俺は思わず

「は？何これ？」

と言ってしまった。

何故なら、校庭にはおびただしい程のゾンビの大群が居たからだ。

「光治デメエ！何が「ゆつくり行くぞ」だ、いきなり大声上げて思いきりダツシュしやがって！」

祐介が怒鳴ってきた。

「仕方ねえだろ！アイツ等目が見える奴だったんだから！」

俺は大声を上げて思いきりダツシュした理由を言った。

「ゾンビが目が見えるのは当たり前前だろうが！」

祐介に反論された。

だって、ス デットだとアイツ等目が見えないんだぞ！

目の前にゾンビが居たが

俺は

「邪魔だあああ！」

と叫んでゾンビをぶつ潰してまたダツシュした。

「もうすぐ校門だぞ！頑張れ！」

俺は皆に向かって大声で言った。

まあ、猛ダツシュしてればあつという間につくよな。

そして待たしてもゾンビが立ちはだかったから、真っ先にバットで雑払った。

校門の目の前に来た瞬間

「ギヤアアアアア！」

と誰かの悲鳴がしたから振り向くと、ゾンビが何かに群がっていた。今居るのは、祐介、綾香、隆二、鈴木、吉彦、楓、光太、葵……居ない、幸助が居ない。

ゾンビが群がっている所は、俺がゾンビを薙払った所だ。

「クソッ！」

俺は自分の過ちに苛立ちを感じて悪態を吐いた。

あの時、ゾンビはまだ殺られてなくて、ソレが幸助の足を掴んだのだ。

「おい光治早く行くぞ！幸助はもう助からない！」

隆二の言うとおりだ。

幸助はもう助からない、死んだんだ。

「幸助ゴメン！！！」

俺は幸助に謝ってから、皆と共に学校から出た。

第7話 マジで不幸すぎるんだけど・・・(後書き)

御意見、御感想等お待ちしております。

第8話 やっぱり娯楽の空気はつまいぜ(前書き)

新キャラがちよこつとだけ出てきます。

第8話 やっぱり娑婆の空気はつまいぜ

何とか学校から出た俺達は、とりあえず近くのコンビニに向かって
いる訳だが・・・

街は学校より酷い事になっているんだよねコレが。あちこちで車が
炎上してるし道路とかには血や骨や内臓とかが散乱していて臭いの
なので、それに

ドガアアアアン！！！！

さっきから今みたいな爆発があちこちで起こってるし

パン！パン！パン！パン！

と銃声が聞こえるし、恐らく警察がゾンビに向かって発砲してるん
だろうけどね。

そんなこんなでしばらく歩いてるとコンビニに着いた。

「これは・・・酷い有り様だな」

まあ楓がそう言うのも無理はない。

コンビニのガラスは割れててさらに血が付いてるし、外から見ても
分かる位に中は色々と凄い事になっているからな。

「じゃあちよつと調べてくるか」

俺はバット片手にそう言ってコンビニの出入口（自動ドア）に向か
った。

すると、後ろから祐介と楓が来た。

「一人じゃ危険だろ」

「私は妻としてお前と行動を共にするからな」

「わかったよ。」

「じゃあ、入るぞ」

俺と祐介と楓の三人でコンビニに入った。

コンビニ内も壁や床に血が飛び散っていた。

「とりあえずゾンビがいるかもしれないから、手分けして調べるか」

俺が二人に言うと、楓が真っ先に俺のバットを持ってない方の腕に抱きついた。

「じゃあ私は光治と行動を共にしよう。何せ私達は夫婦だからな」

「あのなあ、それはk「オツケー、じゃあ俺は事務室の方を調べて来るよ」って、オイ」

俺が夫婦は関係無いと言おうとしたら祐介は勝手に事務室の方へ行ってしまった。

「一応リーダーは俺だぞ……」

「しょうがねえな。」

「じゃあ俺達は店内を調べるか」

「そつだな」

「ああそつだ。俺の腕に抱きつくな歩きづらい」

「別に良いだろう。何を恥ずかしがっているんだ？」

「もういい、好きにしる」

俺は今の楓に何を言っても無駄だとわかったから、仕方なく諦めた。

「とりあえず便所だけ調べるか」

「何故トイレだけを調べるんだ？」

「居そうな感じがするからだよ」

俺は楓の質問に答えてから便所の前まで行き、とりあえずノックして見たが、反応は無い。

「よし開けるぞ」

俺は取っ手に手をかけてゆっくりと扉を開けた。中には……誰も居なかった。

「誰も居ないか」

「光治、下を見てみる」

楓が何か気付いたらしく便所の床を指した。そこには

「血？」

そう、床に血が付いていた。え？驚く事じゃない？いやいや、血と
いっても色々な所に飛び散ってるわけではなくて、引きずられた様
な血の跡があった。

「これは・・・用心した方が良いな」

「確かにそうだな」

さつきから俺の腕に抱きついていて腕は腕から離れた。

足音を立てずにゆっくりと血の跡を辿って行くと、個室トイレに繋
がっていた。

「よし開けるぞ」

俺が楓に言うと、楓はバットを構えて頷いた。

そして、ゆっくりと個室トイレの扉を開けた。

中には・・・頭がグシャグシャになって顔がわからない様な人が
便座に座っていた。

あまりにグロ過ぎたから急いで扉を閉めた。

「よし、大丈夫だな。とりあえず戻るか」

「そ、そうだな」

さすがに刺激が強すぎたらしく楓は少し動揺していた。

楓を連れて店内に戻ると丁度祐介も戻ってきた。

「そっちはどうだった？」

俺はゾンビだとかが居ないか聞いてみた。

「誰も居なかったぞ。」

そっちはどうだったんだ？」

祐介は答えて、俺に同じ様な事を聞いてきた。

「トイレにグロい死体が一体あったが、ゾンビは居なかった」

「そうか」

「じゃあ、食料と水を探すか」

店内が安全だとわかったから俺達は食料と水を探すことにした。

そして収穫は、カロリーメイト数個、ポテトチップス数袋、おにぎり数個、etc

まずまずの収穫を得て、俺達はコンビニから出た。

「やっぱり娑婆の空気はうまいぜ」

「お前は犯罪者か？それとも長期入院でもしてたのか？」

祐介の言ったことに俺は突っ込んだ。

「収穫は？」

吉彦が真っ先に聞いてきた。

「まあまあだな。」

あと、吉彦の分は無いからな」

「えーマジで!?!」

「冗談だ」

俺はちょっと吉彦をからかった。
なんだから、こうからかって困ってる奴の顔を見ると心の何処かに
快樂が生まれてくるんだよな。

「アンタって、どっちかというところよな」

鈴木が開口一番にそう言った。

「酷いなまったく、俺はSじゃねえぞ。
ちょっと相手を困らせて快樂を得てるだけだぞ」

「そうゆう人をSって言うのよ」

反論したら鈴木に論破されました。やっぱり元副会長には敵わない
よまったく。

「そういえば先輩方、親に連絡したんですか?」

光太がいきなり俺達に聞いてきた。
親ねえ……

「してないぞ」

「ううん、してないよ」

「してないわ」

「してないな」

「そういえば、してないな」

「いや、してないが」

祐介、綾香、鈴木、隆二、吉彦、楓の順に答えた。俺は答えなかった。

「お前等は電話したのか？」

俺は光太と葵に同じ様な事を聞いた。

「はい、だけど親は出てきませんでした」

「・・・私も同じです」

なるほど、電話はしたけど出てないのか。

「じゃあ俺達も電話するか」

祐介がそう言ってケータイを出して電話をかけた。その後続く様にして綾香、鈴木、吉彦、楓もケータイを出して電話をかけた。

しばらくすると、ケータイを出してた五人はケータイをしまって首を横に振った。

どうやら出なかったらしい。

「あれ？坂本先輩と片岡先輩は親に電話しないんですか？」

光太が電話をしなかった俺と隆二に聞いてきた。

「ああ、アイツなら大丈夫だろう」

大丈夫って、隆二の親は海外にいるのか？

「片岡先輩は？」

「親はいないよ。昔、交通事故で両親共々死んだんだ」

俺の言葉に皆は絶句した。やっぱりな、こうなると想像ついたよ。

「す、すみません」

「気にするな。俺だってガキじゃないからな」

光太が謝ってきたから俺は、気にしてないと答えた。それにしても・・・空気が重すぎる。

「それよりも、この後の事を考えようぜ」

俺は重すぎる空気を払う為に話題を変えた。すると、皆がいきなり武器を構えた。

ヤベエ、とりあえずまずは落ち着かせないと！

「まてまて！何か知らないが俺が悪かったから武器を下ろしてくれ
！」

「そうじゃないわよバカ、後ろを見なさい」

俺は鈴木に言われた通りに後ろを向くと、ゾンビの大群が迫って来ていた。

「どうするんだ光治！」

吉彦が聞いてきた。

答えは一つだけに決まってるだろ。

「とりあえず・・・逃げるぞ！走れ！」

俺はそう答え、買い物籠の中にある食料と水が落ちない位のスピードで走った。他の奴も俺と一緒に走った。

何かあのゾンビ達ちよつと速いんだけど、祐介に見せられたウーキグ ッドのと同じ位の速さなんだけど。

そして、しばらく走ってたら囲まれてしまいました。なんでだよ！学校からコンビニ行くまではゾンビなんて出てこなかったのに、何で今になってゾンビの大群が出てきて囲まれるんだよ！

「おい、どうするんだ!？」

祐介が慌てた様子で聞いてきた。

ええっと、どうする？何処かに道は無いのか!？

辺りを見回すと、一つだけ道を見つけた。

「あそこに行くぞ!」

俺はさっき見つけた一つだけの道の方向を指した。道といっても鳥居があつてその後ろには階段が続いてるだけだけど、今は道はそこしか無いので俺達は唯一残された道へと向かった。

ゾンビと戦えば？俺達にそんな事は出来ないぞ。全員がア スミタいに超人じゃないからな。

「本当に此方で大丈夫なの！？」

必死に階段を駆け上がつてると鈴木が心配になつたのか聞いてきた。

「しょうがねえだろ！此方に行かなかつたら、俺達死んでたんだぞ！」

俺はそう答え、振り向かずに階段を駆け上がつていった。

しばらくすると、階段地獄が終わつてそこには神社が見えた。下を見るとゾンビは見当たらない、きっと俺達を見失つたんだらう。

「中々良いところね」

どうやら鈴木はこの神社を気に入つたらしい……ん？あれは

「人？」

と俺が言つと皆が反応した。

「何処に居るんだ？」

隆二が聞いてきたから俺は無言で人が居る方向を指した。

「もしかするとゾンビかもしれないな」

確かに、楓の言うとおりで。人だからといって生きてるかはまだわからない。

「幸い一体しかないけど、皆気を付けろよ。綾香はコレを持っててくれ」

俺はそう言うと皆が頷いたから、俺は綾香に食料と水が入った籠を綾香に渡してからゆっくりと歩き出した。
俺の後を皆がつけている。

そこには、巫女装束を着ている女性が箒を持って地面を掃いていた。巫女さんは俺達に気付いたのか此方を向いた。どうやらゾンビじゃない様だ。それにしても綺麗な人だなあ、大和撫子だよアレ、思わず見とれてしまったよ。

「あら？こんな所にお客なんて珍しいわね」

巫女さんは優しい口調でそう言って微笑んだ。

第8話 やっぱり娯婆の空気はつまいぜ(後書き)

キャラクター紹介に新キャラを追加しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9234x/>

日常が消えたこの世界

2011年12月4日01時45分発行